2012年
12月11日
火曜日

ユージン・ナイダの聖書翻訳

大高博美　教授（言語学）

本日お話しするのは、アメリカで「聖職者」兼「言語学者」として活躍したユージン・ナイダ（Eugene Nida: 1914-2011）による斬新な聖書翻訳理論についてです。ナイダは昨年8月に96歳で亡くなりました。聖書翻訳という分野で不動の業績を上げた言語学者なので、この機会にぜひ一度彼について話しておきたいと思います。

ある宗教が人種や国籍の壁を越えて多くの人々に支持されるようになると、使用言語が複数に跨ることになるために、その経典（聖典）はどうしても翻訳される必要性が出てきます。しかし、しばしばそこには困難な問題が生じます。翻訳一般の問題として、文法や語彙体系あるいはまた社会環境や文化的背景などが異なると、原語から翻訳語へ変換することは極めて困難だからです。つまり、対応する語句が存在しない、あるいはどういう語句を当てても意味がずれるということがどうしても起こってしまうのです。16世紀のイエズス会による日本布教で、「仏教用語を借用して教義を説明したためにキリスト教が仏教の一派であると一部の人々に誤解された」と、以前、何かの本で読んだ記憶があります。

このように難しい翻訳ですが、キリスト教界にあってナイダは、「動的等価翻訳理論」（Functional equivalence）と呼ばれる新翻訳理論を用いて聖書翻訳に新風を巻き起こしました。1943年のことです。ゆえに彼は、今では「現代聖書翻訳の父」と呼ばれています。彼によれば、聖書翻訳に使われる言語表現は、理解しやすいだけはだめで、文化的にも意味をもつものでなくてはなりません。ナイダ以前は、聖書翻訳は主にヨーロッパキリスト教界の指導者たちの手によってなされていました。彼らはキリスト教の教義には造詣が深くても、必ずしも翻訳のプロではありませんでした。結果、彼らに依る様々な言語への聖書翻訳はほとんど逐語的で、修辞技法も顧みられないものでした。このような状況であったために、せっかく翻訳しても言葉を通して聖書の教えを読む人の心に響かせることが困難でした。例えば、聖書の中で語られる出来事は温かい地域で起こったことが多く（しばしば砂漠も）、登場する動物は羊、らくだ、ドンキーなどが中心です。これらの題材はすべて、この地域に住む人にとっては独特の文化的意味（比喩も含めて）をもっていると考えられますが、例えば雪深い北極圏に住むイヌイットの人々に読まれた場合はどうでしょうか。セイウチやアザラシ、アシカなどの他見たことのない人が、聖書に出てくる「羊」をうまくイメージできるでしょうか。この言葉のもつ比喩的意味「従順」なども理解できるでしょうか。深い文化的理解なくして良い聖書翻訳はできないと考えたナイダは、イヌイット語（Inukitut）に翻訳するために24年間を費やしたそうです。これまで聖書を200語以上に翻訳しているナイダですが、異例の長さです。ちなみに、アフリカの一部では、「羊」はやっかいもの扱いされる動物なのだそうですが、こうなると聖書で語られる羊と羊飼いの感動的な話も否定的なニュアンスをもって読まれてしまう可能性があります。翻訳の難しさをあらためて教えてくれる事例です。最後に、ナイダがかつて語った印象的な言を引用して本日のお話を終えます。

No matter in what language one read the Bible, the goal was "to read it, to understand it and be transformed by its message." ■